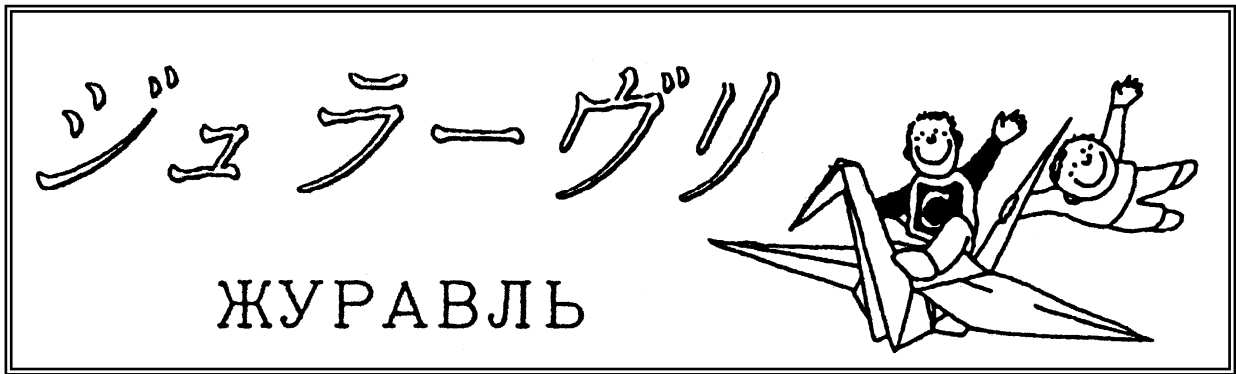




チェルノブイリ原発事故39年の集い ～被爆80年 核も戦争もいらない！～

2025年 4月20日（日）午後1:30～4:30

大阪市立総合生涯学習センター（第1研修室） 大阪駅前第2ビル5階

資料代：800円、学生・障がい者400円

プログラム

1. <事務局報告>

ヒバク80年からチェルノブイリ40年・フクシマ15年へ
～ヒバクシャと連帯し、核も戦争も許さない！～

2. <お話し>

「ヒバクシャの医療に携わって想うこと」

村田三郎 さん（阪南中央病院内科医師）



3. <歌と演奏>アカリトバリ さん

4. チェルノブイリとフクシマからのメッセージ紹介

5. <対談>村田三郎さん & 振津かつみ [救援関西共同代表]

6. <グループ討論> ヒバク80年・日本の敗戦80年…に想うこと[仮]

7. <アピール>

《ベラルーシングッズ・手作りケーキなど救援バザーあります。》

今年アメリカの原爆投下による広島・長崎「被爆80年」、日本によるアジア・太平洋への侵略戦争「敗戦80年」です。1945年当時、広島市の人口は42万人、長崎市は27万人。そのうち、日本の植民地政策のために土地を奪われてやむ無く移り住んだり、軍の強制連行によって広島・長崎で働かされていた朝鮮半島出身者が約1割居たと推定されています。原爆の熱線による火傷、爆風による外傷、そして放射線被ばくの急性障害で、その年末までの死亡者は広島17万人、長崎7万人と推定されています。原爆投下直後の「地獄」を経験し、なんとか生き残った被爆者は「ころ・からだ・くらし」の苦しみを生涯抱えながら生き抜いてこられました。朝鮮人被爆者は、さらに二重三重の苦しみを強いられました。

「集い」では、長年にわたり原爆被爆者と原発被ばく労働者の医療に携わってこられた内科医の村田三郎さん（阪南中央病院）のお話を聞きます。村田さんは「救援関西」の代表として「ヒバクの苦しみを繰り返させないで」と先頭に立って活動してくださった長崎被爆者の故・山科和子さんの主治医も担当されました。また大阪での韓国被爆者「渡日治療」の受け入れにも協力をしてこられました。（プロフィールは下記3頁）



3月5日：核廃絶と平和のための集会（ニューヨーク国連前）

第二次世界大戦後、米ソをはじめ核保有国は核兵器開発を競い、自国内の先住民の土地や植民地支配下の地域で核実験を次々に行いました。1954年に南太平洋のマーシャル諸島で米国が行った水爆実験「ブラボー実験」で、日本の漁船の第五福竜丸がフォールアウト（「死の灰」放射性降下物）を大量に被ばくして乗組員が死亡する「ビキニ事件」が起きたことをきっかけに、原水爆反対の声が国内外で広がり運動が組織されて行きました。このように運動が広がる中で原爆被爆者も声をあげ、「**自らを救**

うとともに、私たちの体験をとおして人類の危機を救おうと決意」して1956年に日本原水爆被害者団体協議会（被団協）を結成しました。山科和子さんも原爆で家族を亡くした悲しみ、健康障害や差別、苦しい生活の中から立ち上がり、東住吉区と大阪府下の被団協の組織化に尽力されました。

米国は原爆開発・製造の「マンハッタン計画」の中で、一つのウラン爆弾と、二つのプルトニウム爆弾を製造しました。1945年8月6日広島にウラン爆弾、8月9日長崎にプルトニウム爆弾を投下する直前の7月16日に、世界初の核実験「トリニティ実験」をニューメキシコ州南部の砂漠で行いました。しかしこの土地は元々マスカレロ・アパッチなど先住民が暮らしていた場所で、風下にはヒスパニックのコミュニティもあります。トリニティ実験のフォールアウトで被ばくした人々に対して、米国政府は未だに何の補償も謝罪もしていません。さらには、マンハッタン計画に使われたウランが採掘されたコンゴ（当時ベルギー領）のシンコロブエ鉱山では劣悪な条件下で鉱夫が働いていましたが、その実態はほとんど知られていません。

核保有国による核兵器開発競争が進められる一方、アイゼンハワー米大統領が1958年に国連で「平和のための核宣言」（アトムズ・フォア・ピース）を行い、原発・核燃料サイクル推進が行われました。ウラン採掘労働と環境汚染による特に先住民の被害、ウラン精錬・濃縮・核燃料製造、原発、再処理、核廃棄物処分まで、核利用のすべての過程で労働者がヒバクし、環境汚染によって市民がヒバクしています。スリーマイル、チェルノブイリやフクシマの重大事故では、さらに多くの人々がヒバクを強いられ、故郷や生業を奪われています。軍事・平和利用の如何にかかわらず原子力利用が続く限り、ヒバクシャが生み出され続けるのです。

「救援関西」は、チェルノブイリのヒバクシャとの交流・支援を続けながら、フクシマ事故被害者の健康保障を求める運動や、世界のヒバクシャとの連帯・交流にもささやかながら取り組んできました。昨年は原水禁大会に参加した米先住民のウラン採掘・精錬被害者を迎えて関西でも講演・交流会を持ち、フクシマ事故被災地での交流も行いました。共同代表の振津は、昨年、核実験被害



マーシャル諸島での甲状腺検診

を受けたマーシャル諸島やマオヒ・ヌイ（仏領ポリネシア）を訪問し検診や視察・交流をしてきました。そして今年3月にニューヨークで開催された核兵器禁止条約の第3回締約国会議には、「救援関西」として、条約の被害者支援と環境回復に関する意見書を提出し、振津が代表参加し、世界各地から参加した核被害者＝ヒバクシャと交流を深めてきました。会議には先住民をはじめとする核実験被害者、ウラン採掘、廃棄物処分による被害者、被ばく兵士、それらの次世代以降の人々などが多数参加し、情報や想いを共有しながら、ヒバク被害の根絶と被害者支援を訴えました。ここでも「顔の見える関係」の大切さを改めて確認しました。

世界では、核や戦争をめぐる国際的緊張が高まっています。ロシアのウクライナ侵攻での核使用の脅し、イスラエルのガザへの壊滅的攻撃でも核使用を容認する発言がされるなど、地域紛争で実際に核兵器が使用される危険性が高まっています。さらにウクライナ支援での米トランプ政権との隔たりから、フランスが「欧州独自の『核の傘』」の方針を示すなど核軍縮に逆行する動きも出ています。一方、広島・長崎の被爆を経験し「核軍縮」の先頭に立つべき日本政府が、核兵器禁止条約に署名も締約国会議への参加もせず、東アジアでの米国の「核の傘」の下、軍拡を続けているのは許し難いことです。

「集い」＜対談＞では、村田先生と振津が対談し、ヒバクシャとの交流で学んだことなど確認しながら内容を深めていきます。また＜グループ討論＞では、参加者がそれぞれの視点で「80年」を語り合い、議論し、「核も戦争もいらない！」今後の取り組みに繋ぐきっかけにしたいと思います。



ぜひご参加ください！

村田三郎さん・プロフィール

1947年、高知県生まれ。1972年、大阪大学医学部卒業。大阪大学医学部附属病院で内科研修後、同病院放射線科勤務。1978年から阪南中央病院に勤務し、現在に至る。関西在住の広島・長崎原爆被爆者の健診と医療に長年携わる。原発被ばく労働者問題にも取り組み、被ばく労働者の労災認定に尽力。

カンパ・会費の納入ありがとうございました

(2025.2.13~2025.3.31)

振津かつみ 東野せつ 副島英樹 榎本恭一郎 増田俊道 田原良治 藤田達 田中章子 猪又雅子 高橋武三 松田光代 相沢一正 崎山昇 大平文昭 赤部三千代 末田一秀 藪本明宏 門林洋子 徳井和美 奥平純子 泉迪子 旦保立子 吉崎恵美子 伊藤勝義 原長生 大西洋司 森本良子 小林真弓 寺西清 堀田美恵子 中城昭夫 稲田みどり 中田昌 奥谷恵子 谷岡文香 熊沢滋子 森妙子 中井かをり 稲田多恵子 衛藤英二 匿名1名(順不動・敬称略)

報告：核兵器禁止条約・第3回締約国会議に「救援関西」として代表参加

振津かつみ

3月3～7日、ニューヨークの国連本部で開催された「核兵器禁止条約」(TPNW)第3回締約国会議(3MSP)に「救援関西」として代表参加しました。私たちは、これまでも核の軍事・「平和」利用のいずれも反対という立場で核被害者支援・連帯に取り組んできました。主にそのような立場から3MSPにも参加し、また会議に先立って、「救援関西」の基本的立場と条約6条(被害者支援)・7条(環境回復)及び前文(核の「平和利用」の権利保証)に関する私たちの意見をまとめた「作業文書」を提出しました(6頁に掲載)。



TPNW 締約国会議の本会議場の様子

「核兵器がもたらす人類存亡の脅威に対処する揺るぎない決意を再確認」

3MSPの最終日に提案された「宣言(案)」には、この会議には「核兵器が初めて実験され使用されてから80周年の開催という深い歴史的意義」があり、「壊滅的な被害を受けた広島・長崎の被爆者を厳粛に思い起こし」「核時代の幕開け以来、核兵器とその実験の一連の行程の被害に苦しんできた、数えきれない犠牲者と生存者を認識」したと記されました。そして「かつてない、互いに絡んだ複雑な世界の難題の最中に、核紛争が人類存亡の脅威として立ちはだかつている」とし、TPNWはこのような「混乱の時代における希望の灯」だと表現し、「核兵器がもたらす人類存亡の脅威に対処する揺るぎない決意を再確認した。」と宣言されました。

宣言に挿入されなかった「平和目的の原子力利用の奪い得ない権利」

今回の「宣言」には、2023年の2MSPの時のように「平和目的の原子力利用の奪い得ない権利」を容認する項目は挿入されませんでした。私たちも含め、核被害者やいくつかのNGOがTPNWに「平和利用容認」の議論に持ち込むことに異を唱えたことを無視できなかったのでしょう。やはり核被害者と連帯して「核と人類は共存できない」と主張し続けて行くことの大切さを感じました。

また、核被害者支援と環境回復では、2MSPで確認された「国際信託基金」の設置の行方も気になっていましたが、最終的に今回は、今後の非公式作業部会で「継続審議」となり、第一回再検討会議の4ヶ月前(2026年7月下旬頃)までに報告書をまとめることとなりました。締約国以外の国々からの資金提供をどう扱うかなど、締約国間で意見がまだまとまらないことも背景にあるようです。引き続き注目し、NGOも参加できるZoom会議などで、核被害者への具体的な支援に結びつく「基金」の運営指針が議論されるように、できるだけプッシュしていきたいと思います。

連日の核被害者関連などサイドイベントに参加

本会議と並行して連日多くのサイド・イベントが企画され(前回以上に多い)、核被害者もNPT関連会議などより多く参加していたと思います。私は「核被害者関連のイベント」にはできるだけ多く参加しようと決めていました。(なので結局、本会議はほとんど傍聴できず、帰国後に本会議の録画や文書、報道を確認したりしているところです。)

私が参加したサイドイベントは下記です。(詳細は割愛します。)

- ・3月1日：「核被害者を思い起こす日」の式典とパネルディスカッション：在米マーシャル人の NGO 「マーシャル教育イニシアチブ」(MEI) とマーシャル諸島共和国政府国連代表部の共催。
- ・3月2日：ICAN 活動家フォーラム：前回より多い参加者 (300 名くらい?)。日本の若者も多数参加。日本と韓国の被爆者・被爆二世、米・仏・英の核実験による被害者、米ニューメキシコ州のウラン採掘被害者なども参加。サーロ・節子さんも車椅子で参加。
- ・3月3日：オーストラリア先住民の核実験被害者の声を聞く：映像とカリーナ・レスターさん (先住民の核実験被害者二世) のお話。「核の真実プロジェクト」主催。



3月3日：サイドイベント「米南西部先住民のウラン採掘・精錬被害」

- ・3月3日：米南西部先住民のウラン採掘・精錬被害：テラシッタ・ケアンナ他、ペトーチ・ギルバード (コーディネート)、「核の真実プロジェクト」主催。
- ・3月3日：原爆被爆とフォールアウト被ばくによる被害者の子どもたちの継世代的被害とトラウマへの支援と調査：「トラウマによる多世代にわたる影響の調査・予防・治療のための国際センター」主催。被害者二世の証言と研究者 (トラウマの研究者) の報告。
- ・3月4日：韓国の被爆者の正義のために：2026 年国際人民法廷 (米国に謝罪を求める) に向けたイベント。韓国の平和団体 (SPARK) 主催。
- ・3月4日：朝鮮半島と北東アジアの核危機の克服のための行動：ピースボート他主催。
- ・3月5日：核廃絶と平和のための集会とデモ：核のない未来のためのマンハッタン・プロジェクト、ピース・アクションなど米国の市民団体の共催。高校生平和大使、ナバホのレオナ・モルガン、南ア在住のコンゴ人活動家のイサイア・モンビロ、などがアピール。
- ・3月5日：日本の被爆者運動からの教訓、核被害者のために何ができるか：原水禁、核のない未来のためのマンハッタンプロジェクト共催。高校生平和大使、原水禁・谷事務局長、HANWA 川野ゆきよさん (森瀧春子さん作成の声明を英訳代読)。原水禁運動と先住民・世界の核被害者との連帯の中で「核と人類は共存できない」が運動の核心となったことなど振津からも補足コメント。
- ・3月5日：ネバダ・セメイ 2.0～核の正義に向けた国際連帯と世代間支援：カザフの若い世代の活動家を中心になって企画した、1980-90 年代のネバダ・セミパラチンスク運動 (カザフと米国の核実験被害者・反核運動の連帯。冷戦時代の終わり頃に、セミパラチンスク核実験場を閉鎖させた。1996 年の CTBT 締結にも繋がった国際連帯。) の精神を紡いで行くための集い。Western State Legal Foundation (米国の反核市民団体), Steppe Organization for Peace (カザフの若者の団体), 他。カザフのウラン採掘被害の現状について、振津から質問。「これからの課題」との返答。
- ・3月6日：ウラン採掘を超えて～核の被害のグローバル・ルーツ：被害コミュニティ作業部会、IPPNW ドイツ支部共催。イサイア・モンビロ (原爆製造に使われたウランがコンゴのシンコロブエ・ウラン鉱山で採掘されたことなどアピール)、レオナ・モルガン (新たな原発推進の下で採掘開始を強行されたアリゾナ州キャニオン・ウラン鉱山での採掘・移送反対など)、リディア・ピーターソン (先住民チェロキーの活動家)
- ・3月6日：被害コミュニティ前線での実践～行動への翻訳プロトコル：「核の真実プロジェクト」。被害コミュニティ調査の倫理的問題など。
- ・3月6日：ジェンダーと核兵器：メキシコ、キリバス、核時代基金、他。
- ・3月7日：「化石燃料条約」への支援の構築～TPNW プロセスからの教訓

科学諮問委員会との非公式懇談会～核被害者の継世代影響について資料提供

上記サイドイベントの他に、3月5日午後には、科学諮問委員会との「非公式懇談会」(非公開)が二つ開催され (一つは研究者との、もう一つは核被害者との懇談会) いずれにも参加することができました。「懇談会」と言っても、科学諮問委員会はとりあえず「意見を聞きおくだけ」という

姿勢に徹していたので、あまり議論ができず残念でしたが。私は、放射線の遺伝的（継世代）影響が自分の専門分野（医科遺伝学）のテーマなので、自分が関わった日本の原爆被爆二世裁判の経緯と、裁判に提出した「意見書」（原爆放射線被ばくが、親の生殖細胞を介して被爆二世に継代的健康影響を及ぼす可能性があることを論証）を日本出発前に急遽、英訳して持参し、核兵器の次世代以降への遺伝的（継世代）影響の重要性を訴えました。科学諮問委員の方々は、締約国から推薦された科学者ですが、医学や疫学、放射線生物学の専門家が少ない（ほとんどいない？）ためか、日本の被爆者や被爆二世の健康や援護策については、あまりご存知ないようで、委員の一人は「日本では被爆二世は被害者として認められていないのですか？」と驚いておられました。今後も引き続き被ばくの健康影響についても資料提供し議論を深め、条約の基礎の一つとして認識を強化してもらう必要性を感じました。「核時代」の始まりから80年を経て、2世以降が核被害者としての「証言」を担うことが多くなってきているようです。それだけに「放射線の遺伝的（継世代）影響」に対する関心も高いように感じました。

核被害者支援・連帯と「核と人類は共存できない」を訴えて

「救援関西」としては引き続き、核被害者支援・連帯、「核と人類は共存できない」という課題を中心に TPNW に（できる範囲で）関わって行きたいと思います。そして国内では、今後も日本の多くの反核平和団体・市民の皆さんと協力し、日本政府に TPNW への署名・批准を求めて行きたいと思います。



本会議で発言するオーストラリアの先住民の核実験被害者二世(左)と米先住民ナバホの女性

TPNW・第3回締約国会議へ提出した作業文書

核被害者支援と環境回復への支援（6条・7条、及び前文）に関する「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」の意見と勧告

I. 核被害と核被害者についての「救援関西」の立場

1.わたしたち「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」は34年前に、ヒロシマ・ナガサキとチェルノブイリを結んで、ヒロシマ・ナガサキの原爆被爆者の経験をチェルノブイリ事故被害者（チェルノブイリ・ヒバクシャ）にも伝え、チェルノブイリ・ヒバクシャを支援することを目的に発足しました。私たちのミッションは、チェルノブイリ・ヒバクシャへの支援と同時に、ヒロシマ・ナガサキとチェルノブイリのような核被害を繰り返させないこと、すなわち軍事の核被害も、「平和」利用の核被害も、繰り返させないということです。

2.このミッションに従って、私たちは原爆被爆者、チェルノブイリ・ヒバクシャだけでなく、ウラン採掘・精錬による被害を受けた米先住民、米核実験被害を受けたマーシャル諸島の人々、フランス核実験被害を受けたアルジェリアやマオヒ（仏領ポリネシア）の人々など、世界の様々な核被害者（ヒバクシャ）とも交流をしてきました。私たちの初代代表で、昨年102歳で他界された長崎被爆者の山科和子さんは、このような私たちの活動の先頭に立って国内外で活躍をされました。

3.2011年の東日本大震災と大津波にともなって東電福島第一原発で重大事故が起こり、数百万人の市民が新たな核被害者（ヒバクシャ）となってしまった（注：法令で定められた一般公衆の被曝限度1mSvを超える被曝）ことに、私たちは深い反省と後悔の念を抱いています。事故からまもなく14年を迎えますが、原子力緊急事態宣言は未だ解除されず、事故を起こした福島第一原発の廃炉の目処はつかず、そして放射能汚染のために今も2万5千人以上が故郷に戻れない状況です。私

たちは、2011 年以降、ヒロシマ・ナガサキとチェルノブイリでの経験を基に、フクシマ事故の被害者の健康と暮らしを守るための活動にも取り組んでいます。また、私たちは、東電と日本政府による放射能汚染水の海洋放出など、故意の放射能拡散に反対しています。

4.核の軍事利用と「平和利用」は、技術的にも物質的にも密接不可分に結びついています。いずれの核利用もウラン採掘・精錬、から廃棄物処分に至るまで、被ばく労働と環境汚染、施設周辺住民の被ばくによる被害なしには成り立ちません。また、「平和利用」と呼ばれる原発も、戦争や自然災害、人的ミス、等々をきっかけに重大事故に至れば、何百万人もの人々の健康と生活に長期的な、取り返しのつかない被害を与え、また、地球的な規模での放射能汚染をもたらすことを、私たちはチェルノブイリとフクシマの原発重大事故の辛い経験から学んできました。世界でこれ以上核被害者を生み出さないためには、人類は核の軍事利用だけでなく「平和利用」もやめるべきです。「核と人類は共存できない」というのが、核被害者（ヒバクシャ）の心からの願いです。

5.核兵器廃絶を求める世界の国々、市民、そして原爆被爆者をはじめ、世界の核被害者の努力で TPNW が成立し、2021 年に多くの国々の参加によって発効したことは、核の軍事利用に反対してきた私たちにも、とても勇気づけられるものでした。核兵器は、今や国際法で正式に違法とされたのです。

6. 条約の前文で「先住民の核兵器活動の不均衡な影響を認識し」と述べられ、核兵器の使用と実験だけでなく、他の核兵器に関連した活動についても言及され、しかも先住民が特に核被害を受けてきたことが指摘されたことは重要です。また将来世代の健康への重大な影響についても懸念が表明されたことも大変重要です。これらは、6 条・7 条で定められている積極的義務、被害者支援と環境回復への国際協力の具体的な内容に反映されるべきです。

7.本条約 7 条では、核兵器の使用や核実験を行った核被害の加害国が締約国となった場合に、被害者のいる締約国が被害者支援や環境回復のための「援助を提供する責任を有する」とされています。しかし、被害者支援や環境回復は、本来、この条約への参加の如何を問わず、核兵器使用や核実験を行った国々、及び核兵器の開発・生産で利潤を得た核兵器産業などが、その加害責任を認め、被害者に謝罪した上で賠償と共に行うべきものです。また、TPNW の締約国でない核保有国、あるいは核兵器国の半植民地支配下にある国々に、多数の核被害者が存在している現実にも留意すべきです。

II. 勧告：

8. 以上に述べた、私たちの基本的立場に基づいて、第 3 回 TPNW 締約国会議際して、私たちは以下を勧告します。

9. 6・7 条の支援の対象となる被害者と環境被害は、核兵器の使用と実験による被害者だけに限定するべきではありません。ウラン採掘・精錬から、核兵器開発・製造・管理、そして核廃棄物処分に至る全ての「核兵器関連活動」による被害者と環境被害を含むことを、全ての締約国と市民社会が本締約国会議で明確に確認すべきです。

10. また上記の被害者の子や孫、将来世代もまた核被害者であることも、全ての締約国と市民社会が明確に確認すべきです。

11. 条約に参加していない国々の多くは加害国である核保有国とその「核の傘」や影響下にある国々です。それらの国々に在る被害者や被害コミュニティが、自国政府から十分な支援を受け取れず、医療等の差し迫った支援や追加被曝を避けるための環境回復への援助を必要としている場合には、国際組織または地域の団体や NGO が必要な支援を被害者や被害コミュニティに届けられるように、信託基金の運用を含む支援のあり方を確認すべきです。

12.核兵器禁止条約の前文に「平和的目的のための原子力の研究、生産及び利用を発展させることについてのすべての締約国の奪い得ない権利に影響を及ぼすものと解してはならない」と記載されているのは、核被害者支援と環境回復の援助を謳う条約には、ふさわしくありません。このような記述は、上述 (I.4.) の理由で欺瞞的です。また、同様の内容が締約国会議の「宣言」に繰り返し記載されたのは、非常に残念なことです。本締約国会議ではそのようなことは繰り返すべきではありません。

以上

2025 原発のない福島を! 県民大集会

～フクシマの悲劇を繰り返すな! と訴え

「2025 原発のない福島を! 県民大集会」が、3月15日に福島市の「パルセいいざか」で開催された。県内外から1000名（主催者発表）が集まった。集会に先立って、原発事故の放射能汚染のために帰還困難区域になってしまった南津島に200年以上も前から伝わる「田植踊り」が披露された。



（「田植踊り」:「まちづくりなみえ」から引用）

この田植踊りは福島県の重要無形民俗文化財、国の選択無形民俗文化財にも指定されている伝統芸能である。津島の方々は、いつ帰還できるかわからない中で、稲作の一連の作業を表現したこの伝統芸能を絶やすことなく将来世代に伝えたい、また引き継いでゆきたいという東北学院大学の学生さんたちと練習を重ね、各地で披露されている。（私は、昨年末に「救援関西発足33年の集い」で石井ひろみさんが話してくださった故郷のコミュニティのことも思い出しながらステージの「田植踊り」を観て胸が熱くなった。）

集会は黙祷の後、角田実行委員長挨拶、「さようなら原発1000万人アクション」から佐高信さんの連帯の挨拶、そして福島大学の小山良太さんから「原発事故の教訓をどう生かすかー震災14年目の福島の現段階ー」と題した講演があった。小山さんは「放射能被害は長期にわたる。現在も60%が営農できていない。農作物の市場価格は下がったまま、市場の構造が変わってしまった。『風評加害』などと言われ分断がもたらされている。『損害』は補償できるが、共同体や営農システムなどの『損失』は補償できない。私たちは事故後10万地点を超える放射能測定を行ったが、国は測定には反対だった。住民参加、対話が必要。」等々話された。続いて「福島からの発信」として、二本松営農ソーラーの近藤恵さんが報告。「有機農業を営んでいたが原発事故被害に遭い、大変な苦労をしながら今、営農ソーラーに取り組んでいる。」第7次エネルギー基本計画の「2030年原発20%以上」という政府方針を厳しく批判し、「福島原発事故の教訓を踏まえた現実的な脱原発を。」と訴えた。そして「福島からの発信」の二人目として、「生業を返せ、地域を返せ!」福島原発事故原状回復等請求訴訟原告団長の中島孝さんが発言し、国と東電の責任を厳しく批判した。さらに、「若者からの訴え」として第27代高校生平和大使が発言。最後に「福島の悲劇を繰り返さない、風化させず、『福島の現状と課題』を見つめ、原発のない福島が実現されるまで声を上げ続けよう。」等の集会アピールを確認し、「フクシマの悲劇を繰り返すな!」とのカードを掲げて参加者で唱和して終了した。

集会全体を通じ、福島事故によって「奪われたもの」の重大さ、事故被害はまだまだ終わらず課題が山積していること、その中で懸命に「生きて」いる被害者の想いが伝わってきた。それだけに、「繰り返すな!」というフクシマからの訴えは、甚大な被害をもたらした国と東電の責任を厳しく問い、「原発のない福島」を求めるだけにとどまらず、全国の原発の再稼働反対と結んだ運動の強化を求める「叫び」でもあると感じた。

振津かつみ

無念の悔しさや被害者の重みを背負った福島の 叫び！

福島から原発再稼働反対を！

鎮魂の日、14回目の3.11を迎えました。この日のあの日は、88歳になる親類の送り人になりました。歳重ねるごとに、近親者や知人、友人が鬼籍に入っています。「忘れない3.11」の空疎なタイトル文字が新聞紙面に躍っています。私たちには忘れたくとも忘れることは出来ない日です。怒り、憤怒、不平、不満、不信、嘘、疑念、悔恨、孤立、孤独、無念、欺瞞、寂寥感、焦燥感、閉塞感、無常感など、この間に体験した人々の物語は長きにわたりいまだ終わりを知りません。ふと亡き人々の言葉が甦ります。「原発事故さえなかったら」「助けることが出来なかったいのち」「も一度会いて一な」「家に帰りだがつたな」と地底からの声なき声が聞こえます。

国と東京電力は、今次第7次エネルギー基本計画で原発の最大活用を謳い、東京電力福島第1原発事故以降、明記してきた「可能な限り原発依存度を低減する」との表現を撤回し、原発を安定供給と脱炭素電源等を理由にして、再稼働、建て替え、次世代革新炉を建設できるようにしました。政府の原発回帰と最大限活用は、事故の反省と教訓を反故にした暴挙であり、フクシマを忘却の彼方に追いやる意思を明白にしたものです。巨大地震が頻繁に起き甚大な被害を齎している日本列島、人々と原発が共存できないことは、今なお続くフクシマ被害の全容によって証明しています。

国と電力資本は、福島事故原発と同型である女川原発を稼働、島根原発再稼働と続き、柏崎刈羽原発を再稼働しようとしています。国と東京電力は、東京電力所有の柏崎刈羽原発6.7号機を再稼働することによって福島事故を終わらせ、原発回帰を本格的に軌道に乗せるつもりです。柏崎刈羽原発再稼働を巡り、新潟では知事選など各種選挙の大きな争点となり、知事は諮問機関の検証委員会をつぶし、国は、市民検証委員会に対抗して避難説明会を各地で開催、東電は同意なし核燃料の装填強行など熾烈な攻防が続いています。再稼働の是非は県民が決める県民署名は15万筆超が集まり条例を決める県議会の動向が焦点となっています。

国と東京電力は嘯きます。福島の復興なくして…、復興と廃炉の両立、福島復興のために残された東京電力…事故やトラブルの過小評価など、国と東京電力は、取り返しのつかない事故を起こしても誰一人責任を取りません。原子力災害による事故被害は渦中にあります。事故原因も定かではありません。廃炉の終わりも示しません。汚染水を海に流し続けても尻のカップです。東京電力が排出した汚染土の処理は国民に押しつけます。子どもたちの甲状腺がん発症と事故による被ばくとの関係も否定し、医療費減免措置も段階的に廃止しています。裁判では賠償金の過剰支払いや帰還を促す開き直る姿勢など、倫理的にも国や東京電力に原発を扱う、原発を動かす資格は到底ありません。再稼働反対は福島の課題です。無念の悔しさや被害者の重みを背負った福島の叫びです。

私たちは、福島原発事故から健康と暮らしを守る会をつくり活動しています。医療費の無料化継続と国の責任による健康手帳の交付、完全賠償を求めています。被害者のこころ、からだ、いのちの復興を果たすためにも脱原発は私たちの運動と不離一体です。福島の悲劇を二度と繰り返さないために、今こそ、福島から脱原発・再稼働反対の声を上げましょう。

2025年3月11日

福島原発事故から健康と暮らしを守る会事務局長 佐藤龍彦

(「福島原発事故被害から健康と暮らしを守る会」 会報5号より転載)

2025 さよなら原発 関西アクション

原発やめて！ 核燃料サイクル中止

～使用済み核燃料の行き場はない 老朽原発を今すぐとめろ～

3.11 福島原発事故から 14 年。毎年行われている「関西アクション」は、今年も昨年に引き続き中之島公園・女性像前の広場で行われました。手話通訳もあり。陽光にも恵まれ、約 500 人が参加しました。



今年から事務局体制が変わり、山口実行委員会事務局長の主催者挨拶の後、蝦名親子三人による津軽三味線の演奏と替え歌が披露されました。見事な三味線の音色とよくとおる朗々とした歌声が広場いっぱいに響き渡りました。蝦名さんは岡山へ母子避難・移住中。福島家族を岡山に招く「せとうち交流プログラム」を立ち上げ、毎年保養活動を行っているとの事。「この地(岡山)で保養活動を継続させるということこそ、私たちが社会に訴えるメッセージです」と。三上元さん(元湖西市長・「浜岡原発廃炉訴訟」原告)は原発事故が忘れられてしまう流れの中で何か行動をしようと訴えられました。米・TMI 事故は覚えている。旧ソ連のチェルノブイリ事故時は発言しなかった。2001 年米同時多発テロ事件をみて、テロに狙われたら原発は日本国民を殺す核兵器に変わる。原発はエネルギー問題でもあるが、もっと大切なのは国防問題。信念を貫き通すと脱原発を訴えられました。また、森松明希子さん(原発避難者・原発賠償関西訴訟原告団代表)は被災者・避難者の人権問題、石川ひなさん(原発に反対するパートタイム労働者)はあらゆる差別に反対、原発にも反対すると元気にアピール。そして、中道将司さん(青森核燃料廃棄物搬入阻止実行委員会事務局長)の「原発再稼働、新增設、核燃サイクル推進が眼目の第 7 次エネルギー基本計画に対し、全国は心を合わせて反対の声を上げましょう」、武藤類子さん(福島原発告訴団団長)の「・・・力を合わせ、励まし合って、危険な原発の歴史を終わらせましょう」との力強いメッセージが代読されました。最後に集会宣言の後、西梅田に向けてのデモとなりました。

14 年経ってもフクシマ事故は終わっていません。緊急事態宣言は続き、今も約 2 万 5 千人が避難生活を余儀なくされ、地域のコミュニティの破壊、廃炉の道筋もみえず、トリチウム汚染水、汚染土壌など、取り返しがつかない大きな犠牲と被害が厳しい現実として突き付けられています。フクシマ事故を繰り返させてはならない、関西に住む者として関電の原発を止めたいと脱原発への思いを新たにしたい一日でした。(猪又)

原発事故から 14 年

原発事故はいのち・生活・生業を奪う

～苦難の中を生き抜く被災者とともに～

兵庫の 9 つのグループが集まって「脱原発兵庫ネットワーク」を立ち上げ、『さよなら原発関西アクション』に連帯して、3 月 9 日神戸で集会とデモを開催しました。エネルギーの地産地消と同様に、地域分散型集会が参加しやすいと考えたからです。

集会では、元裁判官 樋口英明さん『地震と原発 ～私が原発をとめた理由～』と、福島原発事故避難者 菅野みずえさん『今はわたしのこと やがてはあなたのこと』と題するおふたりの話を聞きました。

樋口元裁判官は、「原発問題は難しいという先入観にとらわれず、原発の危険性をシンプルに伝えていくのが大切」と強調された。「福島原発事故によって原発は地震に弱いと証明された → 日本は地震大国である → 原発の過酷事故は極めて甚大な被害をもたらす → 事故の被害を防ぐには原発を止めるしかない」と本質を理解すれば、正しい判断ができると述べられた。

また、行政や司法の場では原発は負け越したが、住民運動を見ると、原発が建設されてしまったのは17カ所、お断りしたのは50カ所に及び、50勝17敗と大きく勝ち越している。住民運動がいかに大切かが、わかると。昨年正月の能登半島地震では海岸が4mも5mも隆起した。「もし珠洲原発が建設されていたら、今日ここに私たちはいないでしょう。私たちは珠洲の方々の活動に助けられた」と言われた。

次に、切実に「自分ごと」として3・11を経験された菅野みずえさんは、事故当時、情報が何もない中、行政も無策で、右往左往するしかなかった行き当たりばったりの避難経験を語られた。また、避難先では「あなた方が放射能をまき散らした」、原発事故や放射能被害を語れば「歩く風評加害者」と言われ口惜しい思いをしたと言われる。

「踏ん張って還らないのが、私の闘い」「原発に反対するのは、賛成の人の子孫も護っている」「被害を受けたからこそ見えてくる様ざま理不尽なことに声をあげる」「生活に密着した基礎自治体の首長は住民のことを考える人を選ばないと！」などなど、菅野さんのおっしゃることはいちいち頷くことばかり。「ジイサン、バアサン、頑張りましょう」との言葉に共感した。

お話を聞いたあとは、元町センター街を西から東へデモ。お休みの日で、「何のデモ？」という顔で見る人が多かった。道ゆく人々に配るチラシも用意したらよかったな～という反省を来年まで忘れないように。不慣れゆえ準備不足もありましたが、《脱原発兵庫ネットワーク》初回の集会・デモは和やかな雰囲気の中お開きとなりました。

(脱原発兵庫ネットワーク参加グループ：原発の危険性を考える宝塚の会/田中あ)



ジャンナさんから3.11フクシマ事故被害者に 思いを寄せるメッセージが届きました

今日は私は一日中、福島原発事故、また津波に遭われ、被害に苦しんでいる被害者の方々のことを考えています。このような惨事は、決して忘れられるものではありません。

被害者の方々が、事故前と同じような、健康と幸せな生活を取り戻すことができますように、心からお祈り申し上げます。

ベラルーシのチェルノブイリ被害者「移住者の会」代表 ジャンナ・フィロメンコ

カンパ・会費納入のお願い

いつも「救援関西」をご支援いただきありがとうございます。被爆80年の今年、4月に「チェルノブイリ事故39年の集い」を持ち、その後も核被害者との支援・交流、人権の補償と確立、核被害者がこれ以上生み出されないように少しづつではあっても活動を続けたいと思います。皆様のご支援とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。なお、すでにご協力を戴いた方にも事務作業上、払込取扱票を同封させて戴いています。どうぞご理解の上、ご容赦下さいますようお願い申し上げます。

* チェルノブイリ事故39年/関西電力への申し入れ（予定）

日時：4月25日（金）午後1時00分～

場所：関西電力本社1階ロビー集合

「チェルノブイリの日」にちなみ関電へ申し入れを行います。

関電の原発を止めていくために、一緒に申し入れを行いましょう！ぜひご参加を！

= ジュラーヴリ141号・目次 =

案内：「チェルノブイリ事故39年」年の集い	p.1
参加報告：核兵器禁止条約・第3回締約国会議に「救援関西」 として 代表参加	p.4
TPNW に提出した作業文書	p.6
原発のない福島を！県民大集会	p.8
転載：福島から原発再稼働反対を！	p.9
さようなら原発関西アクション	p.10
原発事故はいのち・生活・生業を奪う	p.10
お知らせ・目次など	p.12



関西電力は2月13日、またもその場しのぎの、使用済燃料を県外に搬出する「使用済燃料対策ロードマップ見直し」を福井県に提出し、県知事は「実効性がある」と容認しました。使用済燃料プールが満杯となり燃料交換ができなくなるため、3～5年後には原発の運転ができなくなる事態を前にして、それを何としても回避したいと関電は躍起です。今回の「ロードマップ見直し」も六ヶ所村再処理工場の竣工、操業を前提としていて、その破綻は目に見えています。どんなに取り繕うとも本当の狙いは原発構内に乾式貯蔵施設を作ることであり、それによって美浜3号、高浜1・2号の60年運転は可能になります。関電のいう乾式貯蔵施設の設置は「中間貯蔵施設へのより円滑な搬出」のためとは全くの口実です。美浜3号、高浜1・2号の使用済燃料の貯蔵容量は変わらないと言い張りますが、「貯蔵容量の増強策」に他なりません。浜岡、伊方、玄海、女川の各原発でも「使用済核燃料の貯蔵能力の拡大」のために、乾式貯蔵施設設置のための原子炉設置変更許可の申請が出され準備が進められているのです。乾式貯蔵は使用済燃料プールが満杯となり原発が運転できなくなることを切り抜けようとするためのものです。使用済み核燃料という負の遺産をこれ以上生み出さないこと、そして行き場がないまま「核の墓場」としないためにも乾式貯蔵施設設置は許されません。（m）

ニュース発行：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

連絡先：〒591-8021 堺市北区新金岡町 1-3-15-102 猪又方

Tel: 072-253-4644

e-mail: cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

郵便振替：00910-2-32752

口座名：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西